

# 第七回教育デザインフォーラム研究発表要旨

## ① 理科授業における自己調整学習の構想

高井英俊・長沼武志・森本信也

「自己調整学習」は、「自ら学習状況を正確に自己評価し、自分で学習方法を効率的なものに変えながら課題を解決するプロセス」であり、多くの国々の教育目標に合致した学習理論として注目されている。我が国の教育政策においても、「生きる力」の育成や「自ら学び、自ら考える力」が重要視されており、各教科において子どもたちの「自己調整学習」の実現を目指した授業を構想していくことが求められる。本研究では、構成主義的な学習観の下、理科授業において「自己調整学習」を成立させ、子どもたちがより効果的な学習方略を用いて自ら問題を解決していきける力を育成するために必要な指導と評価の在り方について授業実践を通じて検討した。

## ② 児童文化における劇団東童の位置

構 大樹

劇団東童は1928（昭和3）年に創設され、少年少女俳優を中心とした興行を主催した団体である。彼らは1930年代からの日本児童文学の脚色劇や自らの創作劇を通して、リアリズム児童劇を確立していった。また、彼らは坪田譲治や宮沢賢治などの優れた、しかし当時はあまり名が知られていなかった作家たちを世に広めることにも貢献した。東童が児童劇界に残した足跡は大きく、しかも当代の児童文学界にまで影響を与えた存在であった。

本発表では、劇団東童による劇化作品とそれへの評価を分析することにより、戦前・戦中期における児童文学と児童劇の関係性、そして児童文化における児童劇の役割の一端を浮き彫りにしたいと考えている。

## ③ 教育デザインへの提案 ——「否定的なもの力」

山下暁子

現在の学校教育では、学習指導要領をはじめ「子どもたちの現状をふまえ、『生きる力』を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視」している。また、学習指導要領に示される学校教育の活動の方向性は、健康、安全、活力、心身の調和的発達を目指している。

さて、このような教育の方向性によって「生きる力」を育むために「教育デザイン」が配慮す

べきこととは何だろうか。「子どもたちを善くし国を善くしよう」としてはじめられた学校制度は、「ちょっとした考えちがい」によって、その目的とされる「善さ」が「快さ」へとすり替わってしまったと教育学者の村井実是指摘する。しかし、「善さ」のみならず、「快さ」を目的とし実現することさえも難しい状況が、現在の教育にはあるのではないだろうか。

社会の中で生きる者として直面する日々の生活の中では、必ずしも健康、安全、活力、心身の調和的発達が適っている状況ばかりではない。むしろそれらが脅かされている状況にある者もいるだろう。厳しい環境に直面した時にこそ発揮できる「生きる力」を育むためには何が必要か。この問題を問うためには「快さ」や「善さ」の反対側や、対立項について顧みることが求められる。本発表では、「快さ」の反対側にあるもの、対立項としての「否定的なもの」について目を向け、教育デザインにおける位置づけを考えていく。

#### ④ 「きもの」文化の伝承と発信のための教育デザイン

##### —— ゆかたの着装を含む教育プログラムの開発・家庭科での実践と海外への発信

薩本弥生

共同研究者：川端博子・堀内かおる・

扇澤美千子・斉藤 秀子・呑山委佐子

日本の「きもの」文化は、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、若者に理解されにくくなりつつある。一方、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいるが、日本の伝統文化をどのように発信するかについての検討は十分でない。このような「きもの」文化をめぐる現状を打開するために、本研究では、「きもの」文化を伝承するための、そして、世界へ発信するための教育プログラムを開発することを目的とした。「きもの」の内でも最も身近でカジュアルなゆかたを取り上げ、その着装を含めた「きもの」文化の理解を深める体験型教育プログラムを開発した。教材として「ゆかたがわかる」をテーマとするテキスト版、デジタル版を作成し、インターネットでの教育サービスの提供を試みた。ゆかたの着方に関しては日本語版に加え海外に発信するための、中国語版、英語版のデジタル教材も作成し、海外へのインターネットでの教育サービスの提供を試みた。中学・高等学校の協力校10校(累積数)で授業実践し、授業前後にきもの文化や着装感に関わるアンケート調査を実施した。授業実践後の調査結果の分析により日本の若者でも外国の若者でもゆかたの着付けの技能の習得は十分と捉えていないが、着付けの仕方を理解し、着装後に高揚感を感じ、それらの体験がきもの文化への興味関心を高めることに貢献していることが確かめられた。「きもの」文化を紹介する本教育プログラムの開発は、日本の若年層に日本の「きもの」文化を尊重し継承・発展させようとする心を育て、外国の若者にも日本の伝統文化に対する関心を高め国際交流にも寄与できることが明らかとなった。